



Title	19世紀前半カザフ草原におけるロシア帝国統治体制の形成：現地権力機関と仲介者のかかわりを中心に
Author(s)	長沼, 秀幸
Citation	スラヴ研究, 62, 197-218
Issue Date	2015-07-15
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/83688">http://hdl.handle.net/2115/83688</a>
Type	bulletin (article)
File Information	62-08_RN197.pdf



[Instructions for use](#)

[研究ノート]

# 19世紀前半カザフ草原におけるロシア帝国統治体制の形成

—— 現地権力機関と仲介者のかかわりを中心に ——

長 沼 秀 幸

## はじめに

本稿は、19世紀前半のカザフ草原<sup>(1)</sup>におけるロシア帝国統治体制の形成過程を考察するものである。当時のカザフ草原は、西より、小ジュズ、中ジュズ、大ジュズという三つの部族連合、およびロシア帝国の主導によって1801年にヴォルガ川とウラル川の間で創設された内オルダ（ないしはブケイ・オルダ）で構成されていた<sup>(2)</sup>。大まかな社会構造としては、スルタンと呼ばれるチングス裔が貴族層をなしており、1820年代にロシア帝国によってハン位が廃止される以前は、このスルタン層からハンが選出された。そして、各部族の族長、およびアダトと呼ばれる慣習法を執行する判事としてビーという階層がこれに続き、以下その他の遊牧民が彼らに従属するという構造をなしていた<sup>(3)</sup>。本稿では、四つの地域のうち小ジュズと中ジュズに焦点をあてる。考察対象を小ジュズと中ジュズに限定する理由としては、19世紀前半におけるロシア帝国とのかかわり方という点において、これらの地域が他二者と異なる点があげられる。1820年代に、小ジュズおよび中ジュズでは草原社会における伝統的な君主の称号であるハン位がロシア帝国によって廃止されたのに対して、内オルダでは

1 ロシア語史料で、18世紀より「キルギス・ステップ」と呼ばれる地域である。後述する1822年体制および1824年体制が成立して以降は、おおむね、小ジュズに相当する地域を「オレンブルグ管轄下のキルギス・ステップ」、中ジュズに相当する地域を「西シベリア管轄下のキルギス・ステップ」と、地域毎に区別して表記されることも多くなった。そのため、オレンブルグ管轄下のカザフ遊牧民は「オレンブルグ・キルギス」、西シベリア総督府管轄下のカザフ遊牧民は「シベリア・キルギス」と呼ばれていた。「キルギス」とは、1925年になるまでカザフ遊牧民をさす表現であった（「キルギス・カイサク」と呼ばれることもあった）。そのため本稿では、西シベリア総督府治下のカザフ遊牧民を「シベリア・カザフ」、オレンブルグ県治下のそれを「オレンブルグ・カザフ」と表記する。なお、現代のクルグズに居住する人々は「カラ・キルギス」と呼ばれていた。

2 カザフ草原における部族構成や社会構造に関しては、ハドソン、トリベコフ、およびマサノフの著作に詳しい。Alfred E. Hudson, *Kazak Social Structure* (New Haven: Human Relations Area Files Press, 1964); Толыбеков С.Е. Кочевое общество казахов в XVII – начале XX века. Алма-Ата, 1971; Масанов Н.Э. Кочевая цивилизация казахов: основы жизнедеятельности номадного общества. Алматы, 2011.

3 ロシア語史料中では、「族長」に相当すると考えられる人々には、ロドナチャーリニク родона-чальник、メースヌィ・ナチャーリニク местный начальник、スタルシナ старшинаなどの語句があてられることが多い。煩雑を避けるため、本稿ではこれらを一括して最も使用頻度の多い「スタルシナ」と表記する。

1845年まで継続した。また、両ジュズには19世紀前半に帝国の行政制度が順次導入されていったのに対して、大ジュズには19世紀半ばに至るまで導入されることはなかった。これらの点に鑑み、ロシア帝国の統治体制の形成という観点からロシア・カザフ関係を扱う本稿では、対象地域を小ジュズおよび中ジュズに限定し、19世紀前半を通してロシア帝国がいかにしてこれらの地域を自らに包摂していったのかという問題を考察する。

帝国の東方周縁地域の一つを構成するカザフ草原は、1820年代に大きな変容を被った。西シベリア総督府治下のカザフ草原には1822年に『シベリア・キルギスに関する規約』(以下、『1822年規約』と表記する)が、オレンブルグ県治下の地域には1824年に『オレンブルグ地方統治改組にかかるアジア委員会承認意見書』(以下、『意見書』と表記する)が導入された。詳しくは後述するが、具体的には、中ジュズおよび小ジュズにおけるハン位が廃止されるとともに領域的な行政区画に基づく新たな行政制度が導入された<sup>(4)</sup>。これに伴い、1820年代以前より帝国と個別に関係を結んでいたカザフ遊牧民を中心に、新たな行政制度のもとで帝国に勤務する現地人官吏が、帝国の草原統治において重要な役割を果たすことになった。かくして、西シベリア総督府治下の領域には1822年体制が、オレンブルグ県治下の領域には1824年体制が成立した。本稿では、こうした新体制成立以前に当局と何らかのかかわりを持ち、当局の政策遂行に貢献したカザフ遊牧民、および新体制のもと帝国に勤務した、カザフ遊牧民からなる現地人官吏を帝国と草原社会をとり結ぶ統治の仲介者と位置づける。そして、帝国の現地権力機関である、西シベリア総督府およびオレンブルグ県と仲介者とのかかわり方に焦点をあてることで、両地域における帝国統治体制の形成過程を検討する。考察対象とする時代の下限は、1837年から約10年間にわたり草原全体を席卷したケネサル反乱<sup>(5)</sup>が終息する1847年ころに定める。本稿で詳しく検討することは控えるが、反乱の結果、人口や部族構成を中心に草原社会は大きく再編された<sup>(6)</sup>。これに伴い、帝国の草原統治体制もそれ以前と異なるものになったと考えられるため、反乱前後の草原統治の展開はそれぞれ別

4 中ジュズおよび小ジュズにおけるハン位の廃止に関しては、それぞれ以下を参照。野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』東京大学出版会、2011年；*Быков А.Ю. К вопросу о ликвидации ханской власти у казахов младшего жуза // Восточный архив. 2005. № 13. С. 8–21.*

5 18世紀後半中ジュズのハン、アプライの孫であるケネサル・カシモフが主導した反乱。二方面外交を展開したアプライ時代への回帰を目指し、ロシアが導入した行政制度に反発して反乱を展開した。カザフ草原における最後のハンと呼ばれることもある。坂井弘紀「英雄叙事詩が伝える「ケネサルの反乱」」『イスラム世界』44号、1994年、41頁。ケネサル反乱に関する詳細な経過やその歴史的意義に関しては以下を参照。*История Казахстана с древнейших времен до наших дней. Т. 3. Алматы, 2000. С. 344–354; Henri Fruchet, “The Use of History: The Soviet Historiography of Khan Kenesary Kasimov,” in Tom Everett-Heath, ed., *Central Asia: Aspects of Transition* (London: Routledge Curzon, 2003), pp. 132–145; Steven Sabol, “Kazak Resistance to Russian Colonization: Interpreting the Kenesary Kasymov Revolt, 1837–1847,” *Central Asian Survey* 22, no. 2–3 (2003), pp. 231–252.*

6 例えば、郷の数の変動をあげることができる。ケネサル反乱の中心地の一つであったアクモラでは、反乱中の1842年と反乱後の1851年に作成された名簿をみると、1842年時点では郷の数は23である一方、1851年になると25に増加している。より厳密には、7の郷が消滅し、新たに9の郷が生まれている。*История Казахстана в русских источниках XVI–XX веков. Т. 8. Ч. 1. Алматы, 2007. С. 152–171, 373–388.*

個に議論すべきである。

ここで、以下の行論で重要な分析視角となる仲介者という表現について、本稿での立場を明確にしておく必要がある。広く知られているように、カザフ草原の事例に限らず、ロシア帝国は征服地において統治体制を形成するに際して、現地のエリート層と協力関係を結ぶことで彼らを帝国に取り込み、時には現地行政において彼らに依存していた。これは何よりも、現地の事情に通暁したロシア人官吏の不足によるところが大きい<sup>(7)</sup>。そのため、征服地を帝国秩序に包摂するためには、その現地社会と帝国との間を取り持つ何らかの存在が不可欠だったのである。本稿で使用する後述の職歴表や名簿という史料には、そこに記載されたカザフ遊牧民に従属する世帯数が記されていることがしばしばであり、これらの史料を作成した現地権力機関が彼らを介して草原社会を統治しようとしていたことは明白である<sup>(8)</sup>。本稿では、このように帝国権力と草原社会を媒介し、かつ帝国に対して何らかのかたちで貢献した在地勢力を仲介者と定義する。

帝国と現地社会の間を取り持つ仲介者の役割に焦点をあてるアプローチは、近年のロシア帝国史研究において重要な研究動向の一つである。ソ連期においては、帝国の統治を担う現地エリート層の役割が否定的にとらえられることが多かったが<sup>(9)</sup>、近年では彼らに対する否定的評価が見直されつつある<sup>(10)</sup>。カザフ草原に関していうと、現代カザフスタン史学や野田の研究にみえるように、シベリア・カザフの領域における特定のスルタン層と帝国のかかわりを重視する研究が存在する<sup>(11)</sup>。しかし、これらの研究で統治の仲介者として考察の対象となるのは、アブライやグバイドゥッラ<sup>(12)</sup>などのごく少数のスルタン層であり、統治の仲介者の大部分を占めた現地人官吏が考察の対象となることは少ない。以上に加えて、現地エリート層の帝国身分秩序への包摂という観点から、帝国と仲介者の関係を考察する研究も存在する<sup>(13)</sup>。中でも本稿の議論と最もかかわりの深い先行研究として、帝国とオレンブルグ・

7 Andreas Kappeler (Trans. by Clayton Alfred), *The Russian Empire: A Multi-ethnic History* (Harlow, England: Longman, 2001), p. 129.

8 ロシア語史料において世帯はキビトカ *кибитка* と記される。史料中に出てくる統治の仲介者は、おおむね 100–800 キビトカを率いている。

9 ブルジョワジー対プロレタリアートという階級対立を重視するソ連史学においては、「階級・身分 *class-estate*」という概念を用いることで、スルタンやビーなどの従来の支配者層を「搾取」側に分類し、彼らの役割を否定的にとらえていた。Boris N. Mironov (Trans. by Ben Eklof), *The Social History of Imperial Russia, 1700–1917*, vol. 1 (Boulder, Colo.: Westview Press, 1999), p. 199.

10 例えば、部族指導者「マナブ」に焦点を当て、彼らを帝国とクルグズ社会の仲介者として位置づけることで帝政末期ロシア帝国のクルグズ統治を考察した秋山の論考をあげることができる。秋山徹「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立：部族指導者「マナブ」の動向を手がかりとして」『史学雑誌』119 編 9 号、2010 年、1–35 頁；同「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開：統治の仲介者としてのマナブの位置づけを中心に」『スラヴ研究』58 号、2011 年、29–59 頁。

11 История Казахстана с древнейших времен. Т. 3; 野田『露清帝国』。

12 アブライの孫。草原における自らの権威を高めるため、ロシアに臣籍を宣誓する一方で、清朝からも汗爵を得ようとした。

13 Масанов Н.Э. и др. История Казахстана: народы и культуры. Алматы, 2001. С. 179–182.

カザフとのかかわりを分析したスルタンガリエヴァの研究をあげることができる<sup>(14)</sup>。彼女の議論で重視されるのは、オレンブルグ当局がカザフ草原行政に携わる現地人官吏を帝国の官僚制度内に位置づけ、帝国の身分的秩序体系に取り込んでいった点である。彼女によると、当局が特定のカザフ遊牧民を現地人官吏として登用する際には、出自、政府への忠誠、そして言語能力をはじめとした知識が重要な採用基準であった<sup>(15)</sup>。しかし、政府への忠誠に関して、それが「最も主要な」現地人官吏選定の基準であるとするものの、具体的にどのような態度が忠誠の証と考えられたのかということに関しては判然としなない。したがって、忠誠を示したカザフ遊牧民が現地人官吏として最終的に帝国の身分秩序の中に包摂されていくことに関しては筆者と見解を同じくするが、その包摂過程すなわち統治体制の形成過程における帝国と仲介者双方の論理が、どのように調和・矛盾したのかという点に関しては十分に明らかにされていないといえる。

本稿ではこうした問題関心のもと、現地権力機関と仲介者のかかわり方を明らかにする上で重要となる、仲介者が帝国に示した「忠誠<sup>(16)</sup>」に着目する。「忠誠」という表現は、当局が記したカザフ遊牧民に関する史料の中でしばしば見られるものである。この「忠誠」の評価基準を具体的に検討することによって、「忠誠」をめぐる帝国の論理、すなわち当局が仲介者に何を期待したのかという点、および仲介者側の論理、すなわち「忠誠」を示すことが彼らにとってどのような意味があったのかという点が明らかになる。そして、「忠誠」をめぐる両者の論理を分析することで、シベリア・カザフおよびオレンブルグ・カザフそれぞれの領域において、帝国が統治体制を形成していく過程に地域性がみられることも明らかとなる。

以上の点を考察するにあたって本稿で特に重視する史料が、現地人官吏や、現地人官吏ではないが当局と何らかのかかわりをもったカザフ遊牧民に関する職歴表 *формулярный список* および名簿である<sup>(17)</sup>。職歴表は、前述のスルタンガリエヴァの研究を含め、近年のロシア・カザフ関係史研究において徐々に利用されるようになってきている。帝国における身分制度を考察したシュペリヨフが述べているように、職歴表は帝国に勤務した官吏の情報を知る上で「最も重要な歴史的史料」であるといえる<sup>(18)</sup>。職歴表は、帝国に勤務する官吏を包括的に把握し、彼らにしかるべき褒賞を授与するために1798年から帝国全土で作成されるようになり、①官位、氏名、父称を含む家系、職務、生年月日、宗教、過去の褒賞、②出自、③世襲領地の有無、④教育の有無、⑤戦争への参加の有無、⑥過去の犯罪履歴、⑦職務にお

14 スルタンガリエヴァ、グルミラ（宇山智彦訳）「南ウラルと西カザフスタンのテュルク系諸民族に対するロシア帝国の政策の同時性（18-19世紀前半）」『ロシア史研究』28号、2008年、61-77頁；*Султангалиева Г. Казахское чиновничество Оренбургского ведомства: формирование и направление деятельности (XIX) // Acta Slavica Iaponica. 2009. № 27. С. 77-101.*

15 *Султангалиева. Казахское чиновничество. С. 83-86, 98.*

16 ロシア語史料中では、ウセルグエエ *усердие* やブレダンノスチ *преданность* と表現されることが多い。

17 これらの史料群は、以下の史料集に収録されている。*История Казахстана в русских источниках XVI-XX веков. Т. 8. Ч. 1. Алматы, 2007; История Казахстана в русских источниках XVI-XX веков. Т. 8. Ч. 2. Алматы, 2007.* 前者がシベリア・カザフ、後者がオレンブルグ・カザフに関する史料集である。

18 *Шенгелёв Л.Е. Чиновный мир России XVIII – начала XX в. Санкт-Петербург, 1999. С. 19.*

ける休暇期間の有無、⑧職務引退後の所在地、⑨家族情報などが主な記載項目であった<sup>(19)</sup>。一方の名簿も、史料としての名称は異なるものの、資料作成の目的および記載内容は職歴表とほぼ一致している。こうした史料的性格を踏まえると、本稿で使用する職歴表および名簿は、帝国全体における行政・官僚制度の中で、現地人官吏としてのカザフ遊牧民に対して帝国がどのような意義や役割を与えていたのかという点を明らかにする上で有用であると考えられる。本稿では、従来の研究において頻繁に用いられてきた諸史料に加えて<sup>(20)</sup>、こうした史料を積極的に活用していく。

## 1. 西シベリア総督府管轄下のカザフ草原

本節では、前述の『1822年規約』の結果成立した1822年体制を、ロシアとシベリア・カザフのかかわり方を考察する上での画期と定める。カザフ草原を含む広大な異族人<sup>(21)</sup>地域は、1822年にシベリア総督スペランスキーの主導で改革された。1822年の『シベリア諸県のための諸法令』によってシベリアは東西二つの総督府に分割され、中ジュズの領域は外管区としてオムスク州に属した<sup>(22)</sup>。そして、同年の『1822年規約』によりシベリア・カザフの領域には管区制度が導入された<sup>(23)</sup>。管区制度は、上位の機関より「西シベリア総督府（総督）—オムスク州（長官）—管区（上級スルタン）—郷（郷長）—アウル（アウル長）」という構造となっており、管区庁以下の行政機関では基本的に選挙で選ばれたカザフ遊牧民

19 Шенелёв. Чиновный мир России. С. 18–19.

20 ロシア・カザフ関係に関する従来の研究では、Материалы по истории политического строя Казахстана: со времени присоединения Казахстана к России до Великой Октябрьской социалистической революции. Т. 1. Алма-Ата, 1960; Казахско-русские отношения в XVIII–XIX веках (1771–1867 годы): сборник документов и материалов. Алма-Ата, 1964などがしばしば引用される史料集である。これらはソ連期に編纂されたものであり、党中央の公定イデオロギーに沿ってそれぞれの史料が選定されているという史料的制約が存在する。この点に留意しつつ、本稿でもこれらの史料集を使用する。

21 異族人という概念は18世紀後半から本格的に使用されるようになり、1822年の『異族人統治規約』によって法的に規定された身分的存在である。同規約によると、異族人は生活様式に応じてさらに三つのカテゴリーに区分された。すなわち、農耕を営む定住異族人、家畜を伴い季節移動を行う遊牧異族人、そして狩猟採集を営む放浪異族人である。Полное собрание законов Российской империи. Т. 38. 1822–1823. С. 394.

22 東シベリア総督府はイルクーツクにおかれ、西シベリア総督府はトボリスクにおかれた。西シベリアは、トボリスク県、トムスク県、オムスク州から構成され、オムスク州は内管区と外管区に分割された。内管区は、オムスク、ペトロパヴロフスク、ウスチ・カメノゴルスク、そしてセミパラチンスクである。内管区はさらに郷 волость と分区 стан に分割された。Безвиконная Е.В. Административно-правовая политика Российской империи в Степных областях западной Сибири в 20–60-х гг. XIX в. Омск, 2005. С. 71; История Казахстана с древнейших времен. Т. 3. С. 299.

23 1824年にカルカラル管区およびコクシェタウ管区、クシュムルン管区が1825年、31年にはアヤグズ管区、32年にアクモラ管区、33年にバヤナウル管区およびウチブラク管区、34年にアマンカラガイ管区、そして44年にコクベクトウ管区が開設された。

が長となった<sup>(24)</sup>。各管区にはそれを統括する管区庁という役所が設置された。管区庁では上級スルタンを頂点とし、以下主要な官吏として、オムスク州長官に任命された2名のロシア人および選挙で選ばれた2名のカザフ遊牧民からなる代表委員職が設置された<sup>(25)</sup>。1838年の『シベリア・キルギス個別統治規程』でオムスク州が廃止されるまで、西シベリア総督府内のカザフ案件の多くはオムスク州当局が処理し、それ以降は新たに設置された辺境庁 *пограничное управление* がカザフ案件を掌った<sup>(26)</sup>。本章では、以上の1822年体制成立以前と以後それぞれの時期におけるオムスク州や辺境庁を中心とした行政当局と仲介者とのかわりを論じる。

### 1-1. 1822年体制以前における帝国と仲介者のかかわり

ロシア帝国のカザフ草原への勢力拡大は、堡壘や要塞を建設し、それらを結んだ要塞線を国境として、それを随時南下させていくという手法で行われた。各拠点にはコサック軍やバシキール・ミシャーリ軍などが配備され、彼らには国境警備が主な任務として課された<sup>(27)</sup>。ロシア帝国は、自らの領土を拡大するにあたって常に国境外の状況に関するあらゆる情報を収集しようとしていた<sup>(28)</sup>。そのため、軍人や東洋学者を中心にたびたび国境外の調査・探索が行われた。

シベリア・カザフの領域に関して、当局がこのように草原をめぐる情勢に敏感であった背景の一つとして、キャラバン・ルートの安全保障をあげることができる<sup>(29)</sup>。例えば、ロシア・

24 ( ) 内は各行政機関の長の名称である。管区以下のそれぞれの行政機関の規模は、アウルが50-70のキビトカ(キビトカは世帯を意味する)、郷が10-12のアウル、管区が15-20の郷で構成されるとされた。Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 93.

25 Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 94.

26 辺境庁の設置に伴い改変されたのは州以上の行政機関であり、管区以下は従来通りとされた。Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 176-182.

27 オレンブルグを拠点として形成されたオレンブルグ要塞線では、正規軍と非正規軍の混成からなるオレンブルグ独立軍団 *Отдельный Оренбургский корпус* が国境警備を行った。同軍団は、10の大隊からなる第23歩兵師団、ウラル・オレンブルグコサック軍、そしてバシキール・ミシャーリ軍で構成された。オムスクを拠点としたイルティシュ要塞線では、シベリア独立軍団 *Отдельный Сибирский корпус* が同様の任務を負った。この軍団は、15の大隊からなる第24歩兵師団、二つの要塞警備大隊 *гарнизонный батальон*、そしてシベリア・コサック軍で構成されていた。История Казахстана с древнейших времен. Т. 3. С. 305.

28 例えば、1802年に、ブハラで作られた偽造紙幣がオレンブルグやウファで流通しているという事実が発覚した際、事件解決のためブハラへ派遣された特使ガベルドフスキーに対する商務相 *Министр Коммерции* の指令内容を見てみると、こうした帝国の姿勢は明らかである。彼には、道中の通過地域の測量やブハラにおける交易状況の調査に加えて、カザフ遊牧民の部族構成の調査や、ロシア帝国に対して好意的な遊牧民の選別などが任務として課された。Внешняя политика России XIX и начала XX века: документы Российского министерства иностранных дел. Т. 1. Москва, 1960. С. 332-337.

29 19世紀の第一四半期で帝国の対中央アジア貿易における輸出額は4倍の量に増加したが、そのうち3分の2を対カザフ貿易が占めていた。マリコフは、この時期に帝国の主要な貿易相手が中央アジア諸ハン国からカザフに変化したとする。Абашии С.Н., Арапов Д.Ю., Бекмаханова Н.Е. (ред.) Центральная Азия в составе Российской империи. Москва, 2008. С. 134; Yuriy Malikov, *Tsars, Cossacks, and Nomads: The Formation of a Borderland Culture in Northern Kazakhstan in the 18th and 19th Centuries* (Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 2011), pp. 250-251.

清朝間を行き来するキャラバン隊に対するカザフ遊牧民の略奪行為がしばしば問題となっており<sup>(30)</sup>、当局はこれらの問題に対処する必要に迫られていた<sup>(31)</sup>。では、当地域における交易ルートの安定化と帝国の対草原政策はどのように関係していたのであろうか。この点を考察するにあたって、オムスク州長官プロネフスキー（在任 1827–35 年）の残した記録が手がかりとなる。彼が実際に草原を見聞したのは既に管区制度が導入されて以降の時期であるが、「忠誠心のある」スルタンに関して次のように述べている。なお、[ ] は筆者による補足であり以下同様とする。

ブケイ・ハンの孫でありカルカラル外管区上級スルタン、陸軍中佐のトゥルスン・チンギソフ、陸軍少佐ガズィ・ブケエフ、七等文官アリー・コクシャロフ、故ワリー・ハンの妻女アイガヌィム<sup>(32)</sup> [中略]、これらは数え切れないほどの実例をもって、ロシアに対する忠実さと忠誠を示した人々である。彼らは自らの生命を危険にさらし、家族の平穏をロシアのために犠牲にした。[つまり、] 自らの利益を我が帝国の利益の中に見出せなかった人々からの圧迫や非難に耐えたのである。フダイメンディの息子である [中ジュズの] サルト・ユーチン<sup>(33)</sup> と大ジュズのハン、スユク・アブライハノフ<sup>(34)</sup> は、[中略] 以前からずっと、彼らの土地を通りブハラ、コーカンド、中国へと向かう我々の商業キャラバンの保護者である。<sup>(35)</sup>

ここからわかるのは、帝国に対して「忠誠」を示したカザフとそうではないカザフがおり、前者は管区制度における役職や、文官や武官の官位を有しているということである。彼らは、キャラバン隊の安全保障という行いをもって、帝国に「忠誠心がある」と評価された<sup>(36)</sup>。なお、

30 Jin Noda, “Russo-Chinese Trade through Central Asia: Regulations and Reality,” in Tomohiko Uyama, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2012), p. 157.

31 Казахско-русские отношения. С. 203–204, 204–206.

32 彼女と帝国のかかわりに関しては以下を参照。Virginia Martin, “Kazakh Chinggisids, Land and Political Power in the Nineteenth Century: A Case Study of Syrymbet,” *Central Asian Survey* 29, no.1 (2010), pp. 79–102.

33 中ジュズの有力なスルタン、アブルフェイズの孫。後にアヤグズ管区の上級スルタンとなるが、同時に清朝からも公爵を下賜されており、いわゆる二方面外交を展開していた人物である。彼の息子のアブディッラ・サルトもアヤグズ管区の上級スルタン候補に選出される一方で、清朝から公爵を授与されており、サルトの家系は代々ロシア帝国および清朝とつながりが深かった。野田『露清帝国』178 頁；История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 214.

34 中ジュズのハン、アブライの息子。1818 年にロシア臣籍を請願し、1824 年には大ジュズに管区開設を要請しており、早くからロシア帝国との協力関係を望んでいた人物である。しかし、大ジュズが清朝と接する地域であり、清朝との外交問題の悪化を恐れたロシア帝国は、最終的に管区開設の請願を拒否した。野田『露清帝国』73 頁。

35 オムスク州長官のプロネフスキー（在任 1827–35 年）の記録。Броневский С. Записки о Киргиз-Кайсаках Средней Орды // Отечественные записки. Ч. XLII. Санкт-Петербург, 1830. С. 86–87.

36 安全確保の最も代表的な手段として、カザフ草原を通過する商人に対してのパスポート（ロシア語とチュルク語）の交付がある。ロシア帝国は、道中に遭遇するカザフ遊牧民にこのパスポートを提示するよう商人らに指示した。Noda, “Russo-Chinese Trade through Central Asia,” p. 157.



この点はシベリア・カザフに限定された評価基準というわけではなく、オレンブルグ・カザフの場合もキャラバン隊の護送は評価された<sup>(37)</sup>。

安全保障という評価項目は、必ずしもキャラバン隊に限定されていたわけではなかった。アマンカラガイ管区所属のスタルシナ、ヤザ・ヤノフという人物に関して、「1815年に鉱山調査の遠征に際して先導役を務め、慈悲深くも1819年に〔中略〕銀のメダルとともにアンナ大綬章を授与される」と書かれており、キャラバン隊に限らず、草原を通過する帝国側が組織した一団を護送することが「忠誠」として評価されているといえる<sup>(38)</sup>。また、上記のプロネフスキーの引用の中にある、ガズィ・ブケエフについても次のような記述がある。管区制度導入後、彼はカルカラル管区アリテケ・サリモフスカヤ郷の郷長となるが、1850年に作成された彼の職歴表をみると、

1805年、ロシアの使節団とともにタシュケントへの〔通商〕路を開拓したことに對して、金のメダルとともにアンナ大綬章を授与された。1812年に陸軍少佐に昇任。1824年7月14日、アリテケ・サリモフスカヤ郷の郷長に選出される。1838年金のメダルとともにアンドレイ大綬章を授与される。<sup>(39)</sup>

と記されており、使節団の護送が「忠誠」の証として評価されている。ブケエフには陸軍少佐の官位が褒賞として授与されているが、当時のロシア帝国における身分制度では、官位は重要な意味をもっていた。ピョートル大帝により官等表が導入され、文官、武官ともに一等官から十四等官まで序列化された。ブケエフが下賜された陸軍少佐の官位<sup>(40)</sup>は、官等表上では八等官にあたる。そして、官位は貴族身分とも密接に関係しており、武官の場合は九等官で一代貴族、六等官以上で世襲貴族になることができた。これを踏まえると、ブケエフは一代貴族になったことになる。また、前述のトゥルスン・チンギソフとアリー・コクシャロフについても同様であった。前者は1827年に陸軍中佐の官位を、1844年に世襲貴族の勲記を授与され、後者は1800年に八等文官、1819年に七等文官の位を与えられた<sup>(41)</sup>。

以上のように、1822年体制以前においてカザフ遊牧民による護送は、帝国にとって「忠誠」の証として考えられるほど重要な評価項目であった。この背景には、長年にわたる経験と観察の結果得られた「真理」<sup>(42)</sup>、すなわち先導者なしには無事に草原を通過することはできないという帝国側の認識が存在していたのである。

---

37 1837年に作成された、第8区域長マフムド・アルガズィエフの職歴表。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 10.

38 1832年作成、アマンカラガイ管区に属するカザフ遊牧民の名簿。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 97.

39 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 309–310.

40 少佐は1884年に廃止された。

41 1849、50年作成、カルカラル管区に属するカザフ遊牧民の名簿。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 307–308, 350.

42 *Лёвшин А.* Описание орд и степей казахов. Павлодар, 2005. С. 163–164. (初版は1832年)

## 1-2. 1822年体制下の「忠誠」

『1822年規約』が施行され管区制度が導入されると、草原社会は大きな変容を被った。従来の研究で当規約が草原社会に与えた影響として特に重視されてきたのは、ハン位の廃止と領域的な行政制度の導入による遊牧地の制限である<sup>(43)</sup>。これらに加えて、当規約の意義として、従来の社会構造の中での権力関係に制限を加え、草原社会の身分秩序を帝国のそれに適合するように改変・制度化したという点が指摘できる。これは第一に、従来の貴族層たるチングス裔の疎外という側面に見出せる。規約では、①スルタンがアウル行政に介入することが禁じられ、②郷を統治するスルタンは世襲とされ<sup>(44)</sup>、③郷長職を有していないスルタンが郷の統治に介入することが禁じられた<sup>(45)</sup>。実際に、1840年代に作成された、各管区におけるカザフ遊牧民の名簿を見ても、アウル長職についているスルタンは一人もおらず、末端の行政単位においてスルタン層を積極的に活用しようとする意図は西シベリア総督府にはなかったといえる<sup>(46)</sup>。「アウルはスタルシナが統治する」という規定通り、アウル統治を担ったのはスタルシナ層であった<sup>(47)</sup>。第二に、管区制度におけるそれぞれの職位を、帝国内の身分に対応させた。この点に関して、規約では「官位との対照」という項目で次のように定められている。

51. 上級スルタンは任期中、常にロシアの官職において陸軍少佐の官位として承認され崇敬を受ける。
52. 任期満了後も上級スルタンは名誉スルタンとみなされる。3期務めた場合は、ロシア帝国における貴族位の勲記を請求する権利をもつ〔後略〕。
53. 管区庁における代表委員は、ロシア人もキルギスも、既に官位を有していない場合には、九等文官に同定される。
54. 郷を統治するスルタンは、十二等文官の官位をもつ。
55. スタルシナおよびビーは、現在官位を有していない場合には、村長に同定される。<sup>(48)</sup>

このように、上級スルタンから末端の行政機関のアウルの長まで、それぞれの職位をロシア帝国における身分に対応させたのである。

以上のような特徴をもった管区制度は「ロシア帝国の庇護を求め、臣籍を宣誓した郷から漸次的に導入」された<sup>(49)</sup>。管区開設に際して重要な役割を果たしたのはコサック部隊であった<sup>(50)</sup>。

43 *Безвизовная. Административно-правовая политика Российской империи.* С. 71; 野田『露清帝国』65-75頁。

44 郷長職保持者以外の家系による郷長職就任の可能性を排除する目的があったと考えられる。

45 *Материалы по истории политического строя Казахстана.* С. 94.

46 *История Казахстана в русских источниках.* Т. 8. Ч. 1. С. 111-135, 136-144, 145-152, 153-171, 172-208, 214-262.

47 *Материалы по истории политического строя Казахстана.* С. 94.

48 *Материалы по истории политического строя Казахстана.* С. 95.

49 *Материалы по истории политического строя Казахстана.* С. 107.

50 『1822年規約』では、管区内の警備機能はコサック部隊が担うと定められている。*Материалы по истории политического строя Казахстана.* С. 94.

例えば、最も早く開設されたカルカラル管区に関しては、1823年12月から1824年の1月にかけて、コサック軍14部隊が組織され、現地に赴き管区開設の準備を行ったことが知られている<sup>(51)</sup>。また、1834年に開設されたアマンカラガイ管区に関しても、コサックで構成された辺境部隊 *заграничный военный отряд* が同管区開設以前の1832年に「現在開設中の管区内に存在する、褒賞に値するカザフ遊牧民の名簿」を作成している。この名簿の中では、例えば次のように、褒賞に値するカザフ遊牧民が記されている。

ヤンサル・ウヴァコフ郷のスタルシナ、トレブ・バイクチュコフ。かつてロシア人長官よりスタルシナの称号を授与され<sup>(52)</sup>、当称号に対する証明書および印章を有している。日ごろの行いは優良で、自らの部族の中では格別な尊敬を受けている。1830年、最近開設中の管区内に存在する500キビトカに「ロシア帝国への」臣籍宣誓を勧めた。そして、それらの人々に先駆けて、彼はロシアへの臣籍宣誓を行った。<sup>(53)</sup>

この名簿には、トレブ・バイクチュコフを含め計6名が褒賞に値する「忠良な」カザフ遊牧民として列挙されている<sup>(54)</sup>。バイクチュコフの事例からわかるように、臣籍宣誓を他のカザフ遊牧民に斡旋することは、自ら臣籍宣誓を行うことと同様に「忠誠心がある」として評価されていたといえる。1820年代以降、帝国の対草原政策の主眼は管区制度の確立・浸透であり、これを促進するカザフ遊牧民側の働きは評価の対象となったのである。後の1842年に作成された別の史料を見ると、バイクチュコフは1834年より同管区の郷長職についている<sup>(55)</sup>。選挙で選ばれた郷長は州当局の承認が必要であるという規定<sup>(56)</sup>とアマンカラガイ管区が1834年に開設されたという点に鑑みると、①「忠誠」の提示（1830年）、②コサック部隊による「忠良な」カザフの調査（1832年）、③管区開設（1834年）、④現地人官吏として登用（選挙後の承認）という一連の流れが見いだせる。史料の不足のため詳細な検証は控えざるを得ないが、管区開設以前に示した「忠誠」がその後の行政制度において帝国に勤務する根拠として機能した可能性が想定できる。少なくとも、管区制度の浸透への貢献を「忠誠心がある」と評価する考え方は他の管区においても同様に見受けられ、この時期西シベリア総督府がシベリア・カザフに期待した主要な「忠誠」の内容は管区制度の受容・浸透であったといえる<sup>(57)</sup>。そし

51 *Безвизовная*. Административно-правовая политика Российской империи. С. 78.

52 別の史料によると、1809年にシベリア独立軍団司令官、陸軍中将グラゼナフから授与されたことがわかる。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 142.

53 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 96.

54 1名のみイスマイル・トクタムィシェフというカザン・タタールのムッラーが含まれている。

55 1842年に作成された、アマンカラガイ管区内に居住するカザフ遊牧民の名簿。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 142.

56 Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 94.

57 例えば、コクシェタウ管区に関しては1827年作成の『ロシア帝国に対して格別の献身および忠誠を示したキルギスのスルタン、スタルシナ、ビーに関する名簿』の中で、「キルギス・ステップにおいて現在導入中の制度 [=管区制度] を、キルギスたちに周知させ *внушением*、受け入れるよう説得するという忠誠」を示したカザフ遊牧民が褒賞の対象となっている。また、カルカラル管区に関しても同様の名簿が作成されている。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 17-19, 20-28.

て、このように管区制度を受容・浸透させることによって「忠誠」を示したカザフ遊牧民には、1820年代以前の事例と同様、中央政府、総督や州長官（1838年以降は辺境庁長官）より褒賞が授与された。多くの場合彼らには金品が授与されたが、陸軍将校の官位ないしはコサック軍將校位、さらには貴族位を与えられることも多かった<sup>(58)</sup>。

このように管区制度の確立に貢献するカザフ遊牧民が褒賞の対象となった一方で、管区制度に従わない者は「忠誠心がある」とはみなされなかった。その代表例として、アブライ・ハンの孫であるグバイドウツラ・ワリハノフをあげることができる<sup>(59)</sup>。彼はコクシェタウ管区開設時に上級スルタンに選出された人物である。1833年に作成された、コクシェタウ管区所属のカザフ遊牧民の名簿によると、オムスク州当局が彼にメダルやサーベルなど様々な褒賞品を授与しようとしていたことがわかる。その一方で「しかし、これらの褒賞品は彼に提示されたものであるものの、彼はこれらを受け取らず、管区庁からステップ〔の奥地〕へ逃散した際に、1827年3月3日づけの管区庁の報告書第278号とともに、州長官のもとへ戻された」とも書かれている<sup>(60)</sup>。この時のグバイドウツラの行動は先行研究でも言及されている。彼は自らコクシェタウ管区の開設を要請する一方で、清朝から汗爵を得ることに強い意欲を示し、清朝の使節を出迎えるため管区外のバヤナウルに向かった<sup>(61)</sup>。このため、1826年の上級スルタンの選挙では、グバイドウツラ一門を行政から遠ざけようとする当局の意向を反映し、彼よりも「忠誠心がある」アブライ（もしくはカチカンバイ）・ガツパソフが選出された。グバイドウツラは捕縛され、オムスク要塞に抑留されることとなった<sup>(62)</sup>。上記の引用文中のグバイドウツラの逃散は、この時のバヤナウル行きを指していると考えられる。つまり、いったんは管区制度を受け入れることで「忠誠」を示し、褒賞の対象となったものの、管区外へ逃散することで、管区制度を受容する気がないという印象を当局に与えたため、最終的に褒賞品は授与されなかったのである。

その後、彼は1832年にふたたび上級スルタンとなる<sup>(63)</sup>。詳細の分析は今後の課題としたいが、以下の二点から判断するに、この時点でグバイドウツラが再び帝国に対して「忠誠」を示していたことは想像に難くない。第一に、上級スルタン就任後の1833年に陸軍中佐の官位を授与されている<sup>(64)</sup>。第二に、1834年に清朝のタルバガタイ・アンバン（大臣）がグ

58 例えば、アクモラ管区上級スルタン、コヌルクルジャ・クダイメンディンは、金品に加えて1836年に「終身世襲貴族」に任じられている。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 298–299.

59 彼は従来の研究においてもしばしば取りあげられる人物であり、ロシアおよび清朝を巻き込み、ハン位や汗爵をめぐる問題を引き起こしている。詳しくは以下を参照。野田『露清帝国』159–179頁。

60 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 98.

61 野田『露清帝国』159–176頁。

62 *Безвизонная Е.В.* Кокчетавский внешний окружной приказ в 20–30-е гг. XIX в. // Степной край: зона взаимодействия русского и казахского народов. Омск-Кокшетау, 2001. С. 48; История Казахстана с древнейших времен. Т. 3. С. 325–328; 野田『露清帝国』171–172頁。

63 1832年のグバイドウツラの再選に関しては、カザフスタン共和国国立中央文書館所蔵の第338フォンド第1目録第737案件に記録されているが筆者は確認できていない。*Безвизонная.* Административно-правовая политика Российской империи. С. 118.

64 1851年に作成された、コクシェタウ管区所属のカザフ遊牧民の名簿。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 357.

バイドゥウラに宛てた手紙のロシア語訳に西シベリア総督ヴェリヤミノフの所感が付されており、その中でグバイドゥウラは好意的に描かれている。ヴェリヤミノフは、この手紙の中でアンバンがあたかも中ジュズのカザフ全体が清朝皇帝の臣民であるかのように扱っていることに対して不満を示し、この手紙を自らに引き渡したグバイドゥウラの行動が「[ロシアの]皇帝陛下への忠誠心に基づいている」と評価しているのである<sup>(65)</sup>。

以上のように、彼は「忠誠」と「不忠」を繰り返して示している。注目すべきは、「不忠」が彼を現地行政から遠ざける根拠ではあるものの、それが草原からの永遠の放逐を意味したわけではなかった点である。これは、1839年にケネサル反乱に加担したとして流刑されたが、反乱が終息した1847年に、監視つきではあるもののコクシェタウ管区のマイリ・バルティンスカヤ郷への所属が許可されているという事実からも明らかである<sup>(66)</sup>。つまり、「不忠である」との評価は仲介者を一時的に草原行政から排除する根拠ではあるものの、帝国側が期待する「忠誠」を示す限りにおいては過去の「不忠」は容認されていた可能性が指摘できる。ただ、これに関してはより詳細な検討を必要とする。「不忠」の典型例である逃散が草原行政に与えた影響の考察と合わせて今後の課題としたい。

以上のグバイドゥウラの事例に加えて、上記の1833年の名簿には彼の息子であるボラトに関する記載がある。彼は1824年に八等文官の官位を授与され、それに加えて様々な物品をオムスク州当局から提示されているが、父のグバイドゥウラとともに管区から逃散したため、これらの褒賞品は彼の手には渡ることなく州長官のもとへ戻されている。こうした、管区外へ逃散するという「不忠な行い」が根拠となって、1831年より管区庁の監視下に置かれることになった<sup>(67)</sup>。彼は1828年からコクシェタウ管区キルギス・マイリ・バルティンスカヤ郷の郷長を務めるが、こうした「不忠な行い」が度重なり、最終的に1837年に罷免された<sup>(68)</sup>。

以上より、管区制度を受容するか否かというカザフ遊牧民の態度は、西シベリア総督府の草原行政にとっては「忠誠」や「不忠」を判断する基準となっていたといえる。臣籍宣誓を行った者を仲介者として現地人官吏に登用し、管区制度という草原統治の装置の中に組み込む一方で、管区制度に従わない「不忠」な人々を現地行政から遠ざける政策をとったのである。

## 2. オレンブルグ県管轄下のカザフ草原

本節では、『意見書』がだされた1824年を時代的区切りとし、それ以前と以後におけるオレンブルグ県と仲介者のかかわりを論じる。1824年体制における最大の特徴は、部・区域制度という領域的な統治体制にある。部・区域制度は前章で扱ったシベリア・カザフの領域に導入された管区制度と対比して考えることができる。まず、1824年の『意見書』に

---

65 Абдирасилова Л.А., Жанаев Б.Т., Исахан Г.Т. (ред.) История Казахстана в документах и материалах: альманах. Вып. 3. Караганда, 2013. С. 52–54.

66 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 357.

67 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 99.

68 1851年作成、コクシェタウ管区所属のカザフ遊牧民の名簿。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 355–356.

よってハン位が廃止され、全体を西部、中部、東部の三つの部 *часть* に分割し、オレンブルグ軍務知事によって任命された主管スルタン *султан-правитель* がそれぞれの部を統括することになった。そして、1831年に部以下の行政単位として区域 *дистанция* とスタルシナ区 *старшинство* という領域的な行政区画が導入され、それぞれ区域長とアウル・スタルシナが統括した<sup>(69)</sup>。以上の行政単位の長は、当局から任命されたカザフ遊牧民であった。かくして部・区域制度は成立し、カザフ遊牧民からなる現地人官吏を介してオレンブルグ・カザフの属地的な統治が目指された<sup>(70)</sup>。この中でカザフ案件を中心的に扱ったのがオレンブルグ国境委員会（以下、「国境委員会」と略記する）である。国境委員会は外務省管轄下の組織であったが、現地においてはオレンブルグ軍務知事に直属した<sup>(71)</sup>。本章では、これらの現地権力機関とオレンブルグ・カザフからなる仲介者とのかかわりを考察する。

## 2-1. 1824年体制以前の帝国と仲介者のかかわり

シベリア・カザフの領域同様、オレンブルグ・カザフの領域においてもキャラバン隊の安全保障は懸案事項であった。特に、オレンブルグとヒヴァを結ぶキャラバン交易では<sup>(72)</sup>、草原を通過するキャラバン隊がしばしば略奪を受けた。1823年にオレンブルグ軍務知事のエッセンが、こうした略奪を防ぎ同地に「平穏を実現するため」に当問題を審議することを目的とした、カザフ遊牧民からなる特別委員会を設置することを通達しているが<sup>(73)</sup>、これはカザフ遊牧民による略奪が当局にとって重大な問題であったことを物語っている<sup>(74)</sup>。略奪品としては、交易品や金品のみならず、ロシア系商人なども略奪対象となることが多く、彼らは奴隷としてヒヴァで売買されることも少なくなかった<sup>(75)</sup>。このような状況において、オレンブルグ県がカザフ遊牧民に期待した「忠誠」とはどのような内容であったのであろうか。以下ではこの点について考えてみたい。

69 スタルシナ区は領域的な区画であるが、これを構成するのは遊牧単位のアウルである。本稿では、シベリア・カザフの領域に導入された行政単位としてのアウルと区別するため、オレンブルグ・カザフの領域における末端行政単位にスタルシナ区という語をあて、その統率者にアウル・スタルシナという語をあてる。Зиманов С. Политический строй Казахстана первой половины XIX века и Букеевское ханство. Алматы, 2009. С. 225.

70 Зиманов. Политический строй Казахстана. С. 225–228. 設立当初の区域は合計で 32 におよび、主に国境や各部の境界などの境域地帯に置かれた。段階的に区域は内地へ拡大し、19 世紀半ばの段階で 54 まで増加した。Бекмаханов Е. Казахстан в 20–40 годы XIX века. Алма-Ата, 1947. С. 124.

71 Наурызбаев Э.К. Деятельность Оренбургской пограничной комиссии в первой половине XIX в. // Степной край Евразии: историко-культурные взаимодействия и современность. Омск-Костанай, 2009. С. 45.

72 オレンブルグから中央アジア諸ハン国へ向かうキャラバン交易については次を参照。Мейендорф Е.К. Путешествие из Оренбурга в Бухару. Москва, 1975.

73 Казахско-русские отношения. С. 206.

74 一方のヒヴァ側も、オレンブルグ・カザフのスルタン、シルガズを庇護下におき、彼を小ジュズのハンに認定することで当地における自らの影響力の増大を図っていた。Добросмыслов А.И. Тургайская область: исторический очерк. Тверь, 1900. С. 282–283.

75 ヒヴァは中央アジアにおける奴隷売買の中心地であった。Hudson, *Kazak Social Structure*, p. 59.

次の事例は、1844年に作成されたトゥルマンベト・クンバソフという人物に関する名簿の抜粋である。彼は1820年代以降に部・区域制度が導入された後、第19区域の区域長を務めた人物である。この名簿には、クンバソフと当局とのかかわり方が記されており、部・区域制度導入以前のオレンブルグ県とオレンブルグ・カザフの関係を考える上で重要な情報を与えてくれる。

1812年、アミネバ村の馬 *обывательских лошадей* が盗難され、それを発見することで忠誠を示し、これに対して国境委員会より正当な評価を受ける。1815年、凶暴なジャガルバイルの人々から〔中略〕9匹の馬を取り返すことで忠誠を示した。1816年、ラフマンクル・ダミネフの逃亡した長男を捜索することで忠誠を示し、この奉仕に対して国境委員会より謝意を賜った。1820年、逃亡中だったアフメド・アブドゥルハリレフの捜索で忠誠を示した。1839年には、ヒヴァ遠征のためのらくだの調達によって〔献身を示し〕、このことに対して国境委員会より賞状を賜った。1839年、コサック軍中佐レベデフ（現在は陸軍中佐）のもと遠征に参加した。1843年および1844年には、スルタン、アフメド・ジャンチュリンのもと叛徒スルタン、ケネサル・カシモフの撃退活動〔に参加した〕。<sup>(76)</sup>

部・区域制度導入以前のトゥルマンベトの活動に着目すると、窃盗犯の引き渡しや逃亡住民の捕縛など、彼が主に警備・警察機能を果たしていたことがわかる。そして、これらの活動が「忠誠」として評価され、しかるべき褒賞が当局から授与された。このように、オレンブルグ県がオレンブルグ・カザフに対して期待したのは警察機能であり、そうした期待に応えるカザフ遊牧民は、「忠誠」の証として評価の対象となったのであった。この点は、1820年代以前のオレンブルグ県とオレンブルグ・カザフのかかわり方において重要な特徴として指摘できる。では、1824年以降のロシア・カザフ関係はどのように展開していったのであろうか。次項では新たな行政制度のもと現地人官吏として勤務したカザフ遊牧民に焦点をあてることで、この問いに答えていく。

## 2-2. 1824年体制の成立以降のオレンブルグ県管轄下のカザフ草原

『意見書』以降漸次的に導入された新たな行政制度は、西シベリア総督府管轄下のカザフ草原におけるそれと共通する点も多いが、異なる点も多かった。既に述べたように、オレンブルグ・カザフの領域は全体として三つの部に分割されたが、この『意見書』においては部以下の行政制度が明確に定められておらず、西シベリア総督府における改革と比べると全体として「不完全な性格」であった<sup>(77)</sup>。この点を改善するために、前述の区域とスタルシナ区が導入された。それぞれの長の役割は、同年『アウル・スタルシナおよび主管スルタン補佐官のための規則』および『区域長のための指令』（以下、これらを総称して『1831年規則』と記す）によって明確化された<sup>(78)</sup>。オレンブルグ・カザフに対する統治政策を分析し

76 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 21.

77 История Казахстана с древнейших времен. Т. 3. С. 313.

78 Оленбургский губернатор Ганс создал их. Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 210–214.

たズイマノフが指摘するように、全体として彼らの職務は①区域内のカザフが犯罪などを行わないように監視すること、②主管スルタン、国境委員会、軍務知事、そして要塞司令官などの指令を実行すること、③草原における平穏を保つこと、そして④税の徴収であった<sup>(79)</sup>。①から③は、コサック部隊が治安維持を担当したシベリア・カザフの領域と比較すると、特筆すべき点であるといえる<sup>(80)</sup>。ただ、オレンブルグ・カザフに期待された警察機能は、管区制度に従わせることに主眼を置いていた西シベリア総督府における治安維持活動とは異なっていた。『1831年規則』の第2条には、アウル・スタルシナや区域長に従おうとしないカザフ遊牧民を区域から追い出す旨が定められていた<sup>(81)</sup>。つまり、忠良ではないカザフ遊牧民を、新たな行政制度から排除することが望まれたのである。

このように、オレンブルグ管轄下の現地人官吏に期待された役割は、西シベリア管轄下の現地人官吏と大きく異なっていたといえる。では、統治の仲介者たる彼らは、そもそもどのような過程を経て帝国に勤務することになったのであろうか。換言すると、統治の仲介者として現地権力機関と協力関係を結んだ彼らは、どのような「忠誠」を帝国に示したのであろうか。以下では、現地人官吏の職歴表や名簿を主に使用することでこの問いに答えていく。

オレンブルグ・カザフが帝国に示した「忠誠」を最も端的に表しているのは、東部主管スルタン、アフメド・ジャンチュリンの事例である。彼の献身内容が記されている名簿は1844年に作成された。その一部を以下に引用する。

1830年に、逃走したバシキール人コサック下士官ダンドイバイ・クバトフとその家族を捜索し検挙することによって献身を示した。これに対して先のオレンブルグ総督スフテレン公より賞状を授与された。同年、かの軍隊にいるとき、コサック軍中佐レベデフ指揮下でシベリア当局管轄下の抵抗する諸アウルに対する攻撃および追撃の際に、献身を示した。これに対して〔中略〕表彰された。<sup>(82)</sup>

部・区域制度が導入される以前の「忠誠」は、前節で確認した内容と同様である。同制度導入以降も引き続き警察機能は「忠誠」の評価基準となっており、「忠誠」を示した者に対しては褒賞が授与されたことがわかる。上記の引用の後半部分は、19世紀前半のロシア・カザフ関係を考察する上で非常に有益な情報を与えてくれる。1839年以降のジャンチュリンの活動は軍務である。1830-40年代は、カザフ草原を中心とした地域でロシア帝国の軍事活動が活発化した時期である。1836-38年にはイサタイ反乱<sup>(83)</sup>が、1837-47年にはケネサル

79 Зимапов. Политический строй Казахстана. С. 225; Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 210-214.

80 なお、各主管スルタンには常に100-200人のコサック部隊が付いていた。История Казахстана с древнейших времен. Т. 3. С. 314-315.

81 Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 210.

82 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 43-45.

83 イサタイ反乱は、1836-38年にかけてブケイ・オルダで発生した叛乱。ベルシ族の族長であるイサタイ・タイマノフに率いられた。当時のブケイ・オルダのハン、ジャンギールならびにロシア帝国に対する「聖戦」を唱えて戦った。Brill M. Olcott, *The Kazakhs* (Stanford: Hoover Institution Press, 1995), p. 64.



反乱が発生し、1839年にはオレンブルグ軍務知事ペロフスキーの発意でヒヴァ遠征<sup>(84)</sup>が行われた。ジャンテュリンの事例から明らかなように、これらの反乱における鎮圧活動や遠征に際しては、オレンブルグ・カザフが様々なかたちで動員された。筆者が確認した1845年までに作成されたオレンブルグ・カザフの名簿を見ると、計104名中81名が上記のいずれかの軍務に動員されている<sup>(85)</sup>。これは、軍馬・干草の貸付という形でのみケネサル反乱鎮圧<sup>(86)</sup>に協力したシベリア・カザフとは大きく異なる点である<sup>(87)</sup>。注意すべきは、こうした動員が必ずしも軍務知事や各地の要塞司令官などによる強制的な徴発ではなかった点である。1846年に作成された名簿の中に、西部主管スルタン、バイムハメド・アイチュバコフに関する記述があるが、これには、国境委員会長官の勧めに従って開催された会合において、カザフ遊牧民たちの合意のもと「武装した4450人のキルギス」を供出することが決定されたと書かれている<sup>(88)</sup>。そして、従来通り帝国側が期待した「忠誠」に応えたカザフ遊牧民には褒賞が授与された。アイチュバコフに関して、別の史料には、彼が1815-47年の間に金品、勲章、陸軍将校の官位を与えられた内容が書かれている<sup>(89)</sup>。オレンブルグ当局は、これらの褒賞の授与を通して現地人官吏を身分制度という帝国秩序の中に包摂していったのである。

以上本節における考察を、シベリア・カザフの領域におけるロシア・カザフ関係との比較の観点からまとめておこう。第一に、オレンブルグ県がオレンブルグ・カザフに期待した「忠誠」が、西シベリア総督府のシベリア・カザフに対するものと大きく異なっていたという事実である。オレンブルグ県下のカザフ遊牧民に求められたのは警察機能であった。これは部・区域制度が導入される以前からみられた「忠誠」の評価項目であった。この点と関連して、部・区域制度に従わないカザフ遊牧民を防除することが統治の仲介者たる現地人官吏に求められ

84 ヒヴァ遠征に関しては、テレンチエフやモリソンの論考に詳しい。Терентьев М.А. Хивинские походы русской армии. Москва, 2010; Alexander Morrison, "Twin Imperial Disasters: The Invasion of Khiva and Afghanistan in the Russian and British Official Mind, 1839-1842," *Modern Asian Studies* 48, no. 1 (2014), pp. 253-300.

85 その内訳をみると、ケネサル反乱には50名、イサタイ反乱には西部から5名、ラクダや軍馬の供出を含みヒヴァ遠征には31名が動員されている。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 20-33, 35-41, 45-54, 56-57, 60-63.

86 なお、ケネサル反乱の鎮圧に協力したオレンブルグ・カザフには、現地人官吏として帝国に勤務していなかった者も多く含まれている。反乱鎮圧を指揮した辺境庁長官ラディジェンスキーは、彼らの「将来の奉仕を奨励するという観点」から、反乱鎮圧に協力した現地人官吏以外のカザフ遊牧民の情報も収集した。これは、ケネサル反乱以降のロシア・カザフ関係を考える上で示唆に富む記述であると考えられる。おそらく、同反乱を契機として草原社会は大きく再編されており、反乱の過程で仲介者たる現地人官吏が相当数交代している。ケネサル反乱と草原社会の再編に関しては稿を改めて論じることにはしたい。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 45-46.

87 例えば、1842年に作成されたコクシェタウ管区の名簿(計146名)を参照すると、6名のシベリア・カザフがこのような形で反乱鎮圧に協力している。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 111-135.

88 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 66.

89 1847年作成の職歴表。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 76-78.

た。これは、第1項で確認した、カザフ遊牧民による略奪とそれに付随して起こる奴隷売買問題が背景となっていたと考えることができる。1844年に施行された『オレンブルグ・キルギス統治規程』では、カザフ案件を扱う現地権力機関の一つである国境委員会の責務として、「中央アジアからの奴隷の引き渡しに尽力し対策を講じるべし」と定められており、軍務知事や国境委員会はその対策の一つとして、統治の仲介者の警察機能を重視したのである<sup>(90)</sup>。第二に、「忠誠」の評価項目が警察機能にとどまらず軍務にまで拡大された点である。これは、西シベリア総督府の政策とは大きく異なる点であり、帝国の草原統治の地域性を如実に示している。シベリア・カザフの領域における現地行政を担った管区庁には、「いかなる軍事遠征」および「管区外へ逃散した犯罪者や脱走者の追跡」が禁止されていた<sup>(91)</sup>。一方、オレンブルグ・カザフの現地人官吏は1830年代の諸反乱の鎮圧活動および遠征に多く動員された。つまり、オレンブルグ県は、管轄内のカザフ遊牧民をカザフ草原という帝国の周縁地域における軍事力として活用したのである。第三に、警察機能や軍務に貢献することが、カザフ遊牧民を統治の仲介者として登用する根拠となっていた点である。前述のスルタンガリエヴァの研究では、仲介者登用の根拠としてカザフ遊牧民の「資質」が重視されたと述べるが、その資質として指摘されるのは、当局に協力し、当局からの様々な依頼業務を遂行しようとするカザフ遊牧民の「勲功をたてようとする」姿勢である<sup>(92)</sup>。しかし、登用の根拠となるその資質の内実に関して考察は及んでおらず、彼女が指摘する、当局がカザフ遊牧民の警察機能や軍務への貢献を重視したという事実は、あくまで現地人官吏として帝国に勤務するようになって以降の話である<sup>(93)</sup>。一方、本節の考察は、勤務以前の段階で重視された資質の中にも、オレンブルグ・カザフ特有なものとして警察機能・軍務への貢献があったということを指摘したといえる。オレンブルグ・カザフの警察や軍務への協力は、現地人官吏として彼らの果たすべき責務である一方で、そもそも彼らを現地人官吏にするための根拠でもあったのである。

### 3. 仲介者にとっての「忠誠」

以上の考察の中にみえる「忠誠」とは、あくまでロシア帝国側からみた「忠誠」である。カザフ遊牧民が主体的に残した史料が少ないため十分な考察は困難ではあるが、以下では帝国に対して「忠誠」を示すことをカザフ遊牧民自身がどのようにとらえていたのかということについても考えてみたい。初めてロシア帝国に恭順の意を示したアブルハイル以来<sup>(94)</sup>、カザフ遊牧民とロシアとの関係は、まず前者が後者に対してその庇護下に入ることを要請し、これがペテルブルグで承認された後に、臣籍宣誓の儀式を行うことが慣例であっ

90 Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 220.

91 Материалы по истории политического строя Казахстана. С. 96.

92 Султангалиева. Казахское чиновничество. С. 83.

93 Султангалиева. Казахское чиновничество. С. 99.

94 アブルハイルの臣籍宣誓の過程に関してはドブロスマイスロフの著作に詳しい。Добросмыслов. Тургайская область. С. 5-9.

た<sup>(95)</sup>。こうした一連の手続きは、19世紀前半の段階でも継承されていたといえる。そして、19世紀前半のロシア帝国にとって、このような臣籍宣誓はカザフ遊牧民が示す「忠誠」の一つと考えられていた。また、第1章で指摘したように、既に帝国の庇護下にあるカザフ遊牧民が、未だ臣籍を宣誓していないカザフ遊牧民に臣籍宣誓の斡旋をすることも高く評価された。

次の事例は、管区制度が導入される以前の1820年にドウラト・テレエフという人物がシベリア総督に宛てた請願書の一部であるが、ここには臣籍を宣誓することでカザフ遊牧民が引き出そうとした「忠誠の対価」が映しだされている<sup>(96)</sup>。彼は請願書の中で次のように述べている。

我々の同族、スタルシナ、カズィベク・バイサングロフはロシア帝国の慈悲深い庇護を受けることを承認され、良好な生活をおくっております。この点を考慮して、わたくしとその同族、総勢207名は、8年前にロシア帝国に臣籍を誓った上述の同族 [=カズィベク・バイサングロフ] とともに、我々全員に生活するための土地が割り当てられるならば、王座の前にひれ伏す、すなわち未来永劫ロシア帝国に臣籍を誓うことを望んでおります。[中略] このご慈悲を賜ることができるならば、わたくしは、国境外 [=要塞線の外側] にいるその他多くのキルギスタチが我々に続いてくると期待しております。彼らは、わたくしめの請願に対する決定がいかなる結末になるかということは今か今かと待ち望んでおります。<sup>(97)</sup>

ここでの「土地の割り当て」は、自らが希望する遊牧地の用益権を帝国に保障させるという意味で解釈できる。テレエフにとって、ロシア帝国の庇護下に入ることは、すなわち自らの遊牧地を確保することであったことがわかる。別の史料では、彼の「同族」であるカズィベク・バイサングロフが帝国に臣籍を宣誓するにあたって自らの居住地を保障させていたことが書かれている<sup>(98)</sup>。このように、カザフ遊牧民が臣籍を宣誓するにあたっては「忠誠」の対価として自らの遊牧地を帝国に保障させようとしたのであった。

また、引用の後半部分は、カザフの臣籍宣誓が帝国にとって望ましいことであるとテレエフ自身が認識していた可能性を示唆しているといえよう。自らの請願が受け入れられるなら

---

95 先行研究でしばしば指摘されるように、カザフ遊牧民にとっての臣籍宣誓は全面的な服従を意味するわけではなく、自らの利害関心に基づいた表面的なものであった。Michael Khodarkovsky, *Russia's Steppe Frontier: The Making of a Colonial Empire, 1500–1800* (Bloomington: Indiana University Press, 2002), pp. 51–56.

96 以下で使用する史料集は、ロシア帝国によるカザフ草原の併合がもった「進歩的な」側面を強調する意図で編纂されている。ここではカザフ遊牧民の「自発的な」臣籍宣誓を示す目的で諸史料が選別されており、利用の際には注意を要する。本稿では、必ずしも彼らが「自発的に」併合されたわけではなく、帝国秩序に組み込まれるに際して何らかの「交渉」を行っていた点に注意を払いたい。

97 Казахско-русские отношения. С. 185.

98 1820年にカズィベク・バイサングロフがシベリア総督に宛てた請願書。この請願書には、土地を保障させたにもかかわらず未だに十分な遊牧地が確保できていない旨が記されている。Казахско-русские отношения. С. 186–187.

ば、テレエフに倣い、未だ帝国に臣籍を誓っていないカザフ遊牧民が自らに続くであろうという認識である。帝国が期待した臣籍を誓うという「忠誠」の評価項目をカザフ自身が理解しており、それを交渉の手段として利用していたのである。以上の点を踏まえると、臣籍宣誓やキャラバン隊の護送という「忠誠」は、必ずしも当局から一方的に課せられた義務として当の仲介者には理解されていたわけではないことがわかる。彼らは、「忠誠」の対価を引き出すことで帝国側の期待に応えたのである。

「忠誠」の対価は、遊牧地だけには限らなかった。オレンブルグ・カザフの第9区域長タウケ・アイチュバコフという人物が、1838年に兄の西部主管スルタン、バィムハンメド・アイチュバコフへ宛てて請願書を送っている。タウケは七等文官の官位を有しており、帝国と良好な関係を築いていたことがうかがえる。彼は協力関係を結ぶにあたって、帝国に何を期待していたのであろうか。請願書の中で次のように述べている。

私の帝国への忠誠と奉仕は貴殿もご存知でしょう。1800年から1818年まで、私はオレンブルグ国境委員会の代表委員であり、在職中の1810年頃（正確には思い出せない）、この職務に就いている間であったりそれ以前のものであったりと、様々な奉仕を行ったことに対して、ご慈悲により七等文官という地位に任官されました。〔中略〕今では齢60をこえ、この命が朽ち果てるまで帝国に奉仕し続けることを望んでいますが、残念なことに何の扶養も受けておりませんので、自分と家族を養うのに大いに苦勞しています。私の家族は非常に大規模で、三人の妻と七人の息子がおります。長男のムハメド・ガリーはまさに貴殿のもとで勤務しており、他は私のところにいます。娘も三人おり、〔二人の息子と〕同様に私のところにいます。そのため、貴殿に以下のことを懇願したいと思います。すなわち、貴殿より政府に対して、私の奉仕に対して生活扶養金 *пенсия содержания* の授与を決定するよう請願していただきたいのです。この扶養金とは、現在の私のあまりよくない経済状態に対して、私と家族を扶養するに足る経済的援助〔中略〕として役立つものです。<sup>(99)</sup>

ここにはタウケの窮状が記されている。もちろん、請願書という史料の性格を考えると、彼の訴えている困窮具合は、おそらく多分に誇張されているものと考えられる。そこで、本史料では次の二点に着目したい。すなわち、タウケが「生活扶養金」を要求している点と、扶養金を受給するために帝国に対する自らの「奉仕」を根拠としている点である。「忠誠」に対する金銭や物品の授与が、官位の授与とともにロシア帝国の褒賞システムの一部であった点を考慮すると<sup>(100)</sup>、帝国の論理がカザフ遊牧民にも内在化していた可能性は高い<sup>(101)</sup>。

以上に加えて、帝国側の論理を利用することで褒賞を要求している現地人官吏が存在する。カルカラル管区上級スルタン、トゥルスン・チンギソフ、およびコクシェタウ管区上級スル

99 История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 14–15.

100 Шенелёв. Чиновный мир России. С. 328.

101 東部主管スルタンのアフメド・ジャンチュリンは、1844年のラドィジェンスキー宛ての報告書の中で、褒賞に値するカザフ遊牧民51名全員に、金のメダルなどの物品、金銭、官位のいずれかの授与を推薦している。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 2. С. 20–33.

タン、アブライ・アッパソフらは、1830年にペテルブルグへ赴き皇帝ニコライ1世および外務省に対して請願を行った。彼らの請願内容は、①可能ならば自分たちにハン位を認め、不可能ならば上級スルタンという職位を世襲にすること、②ブケイ裔およびアブライ裔の直系である全てのスルタンに〔ロシア帝国における〕公爵位княжеское достоинствоを与えること、③特定のスルタンたちに陸軍将校の官位、給与、金のメダルなどの物品を与えること、などから構成されている<sup>102)</sup>。おそらく、この請願の本来の趣旨は管区制度の浸透を制限することであると考えられるが、こうした請願の中にも帝国の褒賞システムを利用しようとするカザフ遊牧民の姿勢が読みとれる。以上のように、カザフ遊牧民に求められた「忠誠」は必ずしも片務的なものではなく、それに答えることによってカザフ側に対価を要求する根拠を与えることにもなった。「忠誠」を示した者に褒賞を授与し、これを根拠として彼らを統治に活用するという帝国側の論理は、帝国の行政に貢献することで「忠誠」を示しているのだから自らに褒賞を授与すべし、という論理としてカザフ遊牧民に受用されたのである。

## おわりに

本稿の考察を通して、19世紀前半におけるロシア帝国の統治体制の形成過程ならびにその地域性が具体的に明らかになった。現地権力機関である西シベリア総督府とオレンブルグ県は、自らの管轄地域に統治体制を築いていく過程でカザフ遊牧民からなる仲介者を活用することで、影響力を拡大させていった。本稿ではこの仲介者が帝国に示した「忠誠」の具体的内容に着目したが、この「忠誠」をめぐる帝国側と仲介者側双方の論理を明らかにしたことが、本稿がもつ第一の意義である。帝国側にとって「忠誠」は、カザフ遊牧民に褒賞を授与し彼らを帝国の秩序、すなわち身分制度に包摂する根拠となる一方で、「忠誠心のない」者を草原行政から遠ざける根拠ともなった。後者に関しては、管区制度において郷長職をもたないスルタン層、および管区制度や部・区域制度に従わないカザフ遊牧民の疎外という政策に如実に表れている。注意すべき点は、本稿が特に着目した在地勢力は仲介者となったカザフ遊牧民であり、その他の人々、すなわち仲介者となることができなかつた、ないしはなることを選択しなかつたカザフ遊牧民は主たる考察対象にはしなかつた点である。したがって本稿が明らかにしたのは、統治体制の形成過程において双方の論理が調和する側面であるといえるが、いうまでもなく、互いの論理が矛盾する側面もまた帝国支配が浸透していく過程の重要な局面であるといえる。特に、本稿でも言及したグバイドウウラの逃散やケネサル反乱はその代表例であるといえるが、これに関しては稿を改めて論じることとしたい。

本稿が明らかにした第二の点として、まさに「忠誠」の評価基準にこそ帝国の統治体制形成過程の地域性が存在したということがあげられる。キャラバン隊の護送を評価する姿勢は、19世紀前半を通してオレンブルグ県および西シベリア総督府の双方に見られたものの、警察機能の重視はオレンブルグ・カザフ特有の「忠誠」内容であった。1820年代に領域的統

---

102 外務省アジア局長官ロドフィニキンから西シベリア総督ヴェリヤミノフ宛ての書簡。История Казахстана в русских источниках. Т. 8. Ч. 1. С. 29–33. なお、その他の要求として、カザフの遊牧地に要塞などを建設しないように求めている。

治体制が導入されると、それ以前の時代からの評価項目に加えて、シベリア・カザフには管区制度の浸透・確立に貢献することが、オレンブルグ・カザフには軍務への参加・協力が新たに評価されるようになった。

以上本稿では、カザフ草原を管轄した二つの現地権力機関の政策を中心に考察することによって、当局が草原社会のエリート層を帝国の身分秩序に包摂していく際の具体的様相を明らかにしたといえる。本稿で着目した、仲介者が示した「忠誠」の具体的項目とそれをめぐる支配者と被支配者それぞれの論理の分析は、他地域における統治体制の形成過程との比較に有益な視座を提供したと考えられるが、この点は今後の課題としたい。

## The Formation of Russian Rule over the Kazakh Steppe in the Early Nineteenth Century: Focusing on the Relationship between the Local Authorities and Kazakh Intermediaries

NAGANUMA Hideyuki

At the turn of the eighteenth and nineteenth centuries, the Kazakh Steppe was composed of four regions: the Inner Horde, Little Horde, Middle Horde, and Great Horde. This research note focuses on the penetration of Russian rule into the Middle Horde and Little Horde: the former, i.e., the Siberian Kazakhs, was put under the control of the Western Siberian Governor-Generalship based on the *Statute on the Administration of Siberian Kirgiz (Kazakhs)* in 1822, and the latter, i.e., the Orenburg Kazakhs, under Orenburg Province (*guberniia*) according to the equivalent rules that gradually came into force from 1824 onwards. These rules and statute worked both in the Middle and Little Hordes to divide each into several administrative units, with *okrug*, *volost'*, and *aul* introduced in the Siberian Kazakh Steppe, and with *chast'*, *distsantsiia*, and *starshinstvo* introduced in the Orenburg Kazakh Steppe. At the top of all these units, some Kazakh notables served as intermediaries between the Russian authorities and the local population. By closely examining and comparing the dynamics of this interaction both within the Middle and Little Hordes, I attempt to detect regional particularities in the establishment of Russian rule in the Steppe.

The scrutiny of personnel documents—curricula vitae and nominal lists of Kazakh officials—which helped the imperial authorities to control them effectively, reveals different criteria of “loyalty” (*userdie, predannost'*) that indigenous intermediaries were expected to show to Russia depending on regional circumstances and phase of incorporation. This loyalty was one of the keys to the Kazakh notables' success in accommodating the imperial estate regime as intermediaries conveying Russian rule into the Steppe. Under the jurisdiction of the Western Siberian Governor-Generalship, the safeguard of caravans was an indicator of the Kazakh elites' loyalty throughout the early nineteenth century. After the introduction of the *okrug* system in 1822, the Kazakhs were required to demonstrate loyalty by facilitating the expansion of that system, which was sometimes accompanied by their enticement of other not-yet-loyal Kazakhs to take an oath of subjecthood (*poddanstvo*) to Russia. In the Orenburg region, meanwhile, the Kazakhs were expected to operate as police, such as apprehending deserters and arresting criminals of any sort. The formation of the *chast'-distsantsiia* system from 1824 onward prompted the native elites to undertake voluntary military service as a sign of loyalty particularly during the pacification of the Kazakh revolts and the expedition to Khiva in 1839. The differences in criteria of loyalty clearly reflected the regional particularities of Russian rule in the vast Kazakh Steppe.

The Russian authorities in their turn almost always responded to the Kazakh notables' display of loyalty emanating from one of the above-mentioned criteria by bestowing upon them such rewards as a certain position of commissioned officer, a Cossack military rank, extravagant goods, and monetary grants for their living. These Kazakh elites playing an intermediary role were likely to be well aware of the value of this loyalty, as in several cases these native officials sought either nobility status or monetary grants for remuneration. This confirms the operation of a type of contract through loyalty between the Russian officials and the Kazakh intermediaries, without which the establishment of Russian rule in the Steppe would have been unfeasible.